

「野外料理は楽しかった」

松 カブスカウト 松田
中 サッカークラブの人 中西

松 「はい〜。カブスカウトのカブちゃんで〜す」
中 「こんにちは〜。サッカークラブのさっちゃんて〜す」
松 「さっちゃんってかわいい名前がいいね」
中 「なんやねん頭から。人前でそんなに誉（ほ）めて。なんか、てれくさいなあ」
松 「(歌う) さっちゃんはね。さちこと言うんだ。
（大きな声で）あつ、ぜんぜんちがつてるわ。
あぁびっくりしたわ。君（きみ）はサッカー君（くん）だったね」
中 「こっちがびっくりするわ」
松 「そうすると、あんまりかわいいなまえでないですね」
中 「なんでそうなるの？さっちゃんってかわいいよ」
松 「だってね。□
（歌う）さっちゃんはね。サッカーく〜んと・・・へんだわ。さちこじゃないもの」
中 「なにを一人で芝居（ひとりでしばい）してるんですか。
劇団（げきだん）ひとりの親戚（しんせき）ですか」
松 「いやいや、そんな人は知りませんが。顔が似てますか？」
中 「顔も似ていますよ」
松 「え、その人、どんな顔しているの」
中 「君のような顔でしょうが」
松 「あ、そうか。それは、きっとハンサムな人でしょう」
中 「君は、そうとう自信をもっていますね」
松 「でも、君のさっちゃんは、かわいくはないですね」
中 「ぼくのさっちゃんは、かわいくないわけ。ようわからんわ」
松 「だって、サーカー君でしょ。さっちゃんって、女の子がいいです。
君（きみ）はどうみても女の子ですか？」
中 「見ればわかるでしょう」
松 「やっぱりそうかなあ。女の子に見えるわ」
中 「見えへんよ。僕は男でしょう。・・・どう見たら、女の子に見えますか」
松 「でもねえ、さっちゃんは女の子でないといけないんですよ。そうでないと、

困りますよ」

中 「でもねえ、それはゆずれませんね」

松 「頭にリボンを結ぶということで」

中 「そんなんでも女の子になるの？」

松 「顔に化粧をすれば、りっぱな女の子になります」

中 「気持ち悪いわ」

松 「ところでサッカークラブには女の子はいますか」

中 「話かえましたね」

松 「いえ、まだ女の子の話です」

中 「しつこいね。クラブには女の子はいません」

松 「あのなんていったかな。女子のサッカーチーム」

中 「ここらへんにはないな」

松 「いや、もっと、大人の強いチームです」

中 「どこにあるかな」

松 「日本全体ですよ」

中 「なでしこジャパンかいな」

松 「そう、そう」

中 「女子のサッカーチームですよ。かっこういいですよ」

松 「みんな、さっちゃんですか」

中 「ええっ。ほんまにしつこいですね。中にはいるかも知れません」

松 「さちこという女の子がいたりしてー。」

中 「そりゃ、いるかもしれんよ」

松 「やったね」

中 「なにを考えているんですか。何か悪いものでも食べたのですか？」

松 「いやあ、食べた食べた。おいしかったですよ。昨日ね、カブ隊の活動があつてね」

中 「そこでいっぱい食べたというわけですか」

松 「そうそう、それで、食べた、のしかったよ」

中 「何？ ちょっとわからなかった。もう一度言ってみて」

松 「食べた、のしかったよ」

中 「また、変なこと言い出しましたね。

何か一つぬけていませんか。もっぺん言ってみてください」

松 「食べた、のしかったよ」

中 「はは〜ん。食べたことと楽しかったことを一緒に言ってるよね」

松 「最初からそう言っています」

中 「自分では、そう言っているつもりなんだよね」

松 「すっごく、おいしかったよ」

中 「自分だけ幸せそうですね。ちょっと、ちょっと、口あけてみてください」
松 「(横をみて) あ〜ん。ちょっと恥ずかしいですよ。これぐらい？」
中 「まだ、見えません」
松 「何か見えますかね」
中 「もうちょっとですよ。はい、大きくあけて」
松 「あ〜ん」
中 「あ、見つけた。ありましたよ」
松 「なにがあったの？」
中 「『た』の字が一つ奥歯にひっかっているわ。・・・それとってみて」
松 「そんなやつは、おらんでしょ」
中 「まあ、だまされたと思って取ってみてよ」
松 「なにかさっきから、痛かったんだよね」
中 「そうでしょう。『た』の字が原因ですよ」
松 「よいしょっと。お、とれた。『た』の字は、こんな形してるんか。このやろう。
『ナ』と『こ』を引っ張って別々にしてやろう」
中 「いたたたたた！」
松 「返事した。うそだろう」
中 「だめだよ。『た』の字を飲み込まないと二度と『た』は話せませんよ」
松 「え、そりゃ困る。まずそうだぞ。
それじゃあ、・・・ごっくん。・・・にがーい」
中 「アレー。助けてー」
松 「うそだろう。そんなん言うかな」
中 「もう一度、さっきの言葉を言ってみて」
松 「食べた、楽しかったよ」
中 「よくできました。『た』の字が出てきましたね」
松 「お、今度は君の口に『た』の字がひっついてるよ」
中 「これか。『た』の字は、こんな形してるんか。このやろう。
『ナ』と『こ』を引っ張って別々にしてやろう」
松 「いたたたたた！」
中 「返事した。うそだろう」
松 「だめだよ。『た』の字を飲み込まないと二度と『た』は話せませんよ」
中 「え、そりゃ困る。まずそうだぞ。
それじゃ、・・・ごっくん。・・・にがーい」
松 「アレー。助けてー」
中 「うそだろう。そんなん言うかな」
(ちょっと間をあける)

松 「そんなことはないでしょう！」

中 「お遊びはこれくらいで、カブ隊で何を食べたの？」

松 「野外料理コンテストをやったんですよ」

中 「なに？野外料理コンテストって？」

松 「キャンプなんかでね。外でね。みんなでいろいろな料理を作るんです」

中 「それはわかるけど、料理コンテストってどうするの？」

松 「そうですね。カブスカウトって、たくさん組があるでしょう」

中 「いくつあるの」

松 「いまは2つ」

中 「たった、2つだけ。・・全然多くないじゃない」

松 「じゃ、50組」

中 「極端だね」

松 「大阪全体だと何百かな」

中 「話が大きくなるね」

松 「リーダーも入って、組対抗で料理の腕を競うのですよ」

中 「それで？」

松 「料理のテーマを決めて、自分たちのアイデアで料理を作るんです」

中 「おもしろそうですね。どんなテーマがあるの」

松 「昨日は、魚がテーマだったよ。ほかにも肉の料理、野菜でもジャガイモとかなすとか」

中 「まめとか、きゅうりとか」

松 「そうそう。そんなかんじだね」

中 「君の組は、どんな魚の料理を作ったの」

松 「まあ、魚といえば魚だけど、隊長はヒラメだと言っていましたよ」

中 「立派な食材ですね」

松 「それがね、形はヒラメだけどね。お腹の中に小エビとかしらすがうじゃうじゃいます」

中 「そりゃ、ヒラメが食べたんでしょう？」

松 「いえね。ねぎも紅しょうがも入っています」

中 「ヒラメは畑も泳ぐんですか」

松 「泳がへんよ。それにベーコンもありましたよ」

中 「豚のベーコンかな。そのヒラメなかなか食にうるさいですね」

松 「それで、結構いい味がでるんですよ。実は、このヒラメは小麦粉なんですよ」

中 「いいですね。白い色をしていると、海の底に隠れやすいですよ。」

松 「焼くと狐色になります」

中 「おお、本格的ですね。もともとそんな色をしているから、ヒラメらしいですね」

松 「目は干しぶどうなんですよ」
中 「そりゃあ、しぶい目をしていますね」
松 「いえ、干しぶどうの目は甘いです」
中 「んん、かなりおもしろいヒラメになりましたね」
松 「まあ、そんなヒラメでも魚といわけです」
中 「それで、味付けはどうするんですか」
松 「味噌をつけます。味噌を少し水で溶かしてやわらかくします」
中 「ヒラメを味噌につけて食べるんですね」
松 「はい。焼き魚ですね。あくまで魚としてコンテストに出しました」
中 「他には」
松 「いっぱい作りましたよ。アジで作ったつみれ。アジの竜田揚げ」
中 「それは本物の魚ですね」
松 「ボーイスカウトの先輩が作ったのです」
中 「すごいですね。」
松 「はい。楽しかったですよ」
中 「それをいっぱい食べて」
松 「食べた、のしかったよ」
中 「もう、止めさせてもらいます」